

演題名：肥大型心筋症を疑う猫の心不全時における血漿 L-カルニチン濃度の変動について

発表者氏名：○大池三千男　山村知香

発表者所属：おおいけ動物病院・帯広

1. はじめに：L-カルニチンの脂肪代謝における重要性が注目されているが、L-カルニチン欠乏は犬の拡張型心筋症の原因

の一つである。演者は平成 14 年度本学会において、虚血性心疾患で心筋壊死を起こした犬が高 L-カルニチン血症を呈していた事を報告した。平成 15 年度には、完全心ブロックをおこした心筋虚血状態の猫においても血漿 L-カルニチンの上昇がみられた事を報告した。今回、肥大型心筋症を疑う猫の心不全時の血漿 L-カルニチンの血行動態について報告する。

症例：雑種猫、雌、避妊済み、12 歳、体重 3.14kg。主訴は、今朝食欲はあったが、夜帰宅したらうすくまって寝ていた。

身体検査では、体温 38.2°C、心拍数 120 回／分。オシロメトリック法で血圧測定不能であったが、ドッپラー法で収縮期血圧が 79 mmHg と低血圧であった。心電図検査では、S-T 分節の上昇、T 波の增高、第 1 度房室ブロックを認めた。

2. 治療および経過：採血と胸部 X 線撮影後、流涎と呼吸状態悪化の為、ニトログリセリン舌下錠を投与、酸素室にて安静を保った。カリウム補正した乳酸リンゲルを低容量で投与開始し、硝酸イソソルビドとジピリダモールを経口投与した。

心エコー検査では、左心房は 15.4mm と拡大していた。血漿 L-カルニチン ($\mu\text{mol/l}$ 、以下単位略) は、1 回目の入院では、第 1 病日は 22.8、第 2 病日 224.8、第 4 病日 40.0、であった。（　は高値を示す。）

2 回目の入院は第 71 病日から 23.4、第 72 病日 220.7、第 73 病日 103.8、第 74 病日 39.4、第 75 病日 28.3 であった。

3 回目の入院は第 81 病日から 29.5、第 82 病日 43.9、第 83 病日 40.2、第 84 病日 24.1、第 85 病日 22.3 であった。第 106 病日は 35.8 で、臨床症状も安定し、硝酸イソソルビド、ジピリダモール、タウリンの経口投与を継続中である。

3. 考察：猫の肥大型心筋症の末期像は、肥大した心筋が虚血により纖維化を起こし、拡張相肥大型心筋症となり、第 3 度房室ブロックや突然死を引き起こす。本症例の心不全も肥大型心筋症による虚血が原因と考えられる。猫の血漿 L-カルニチンの正常値は、9~35 $\mu\text{mol/l}$ とされている。心不全を呈した本症例の血漿 L-カルニチンは、3 回の心不全とも第 2 日目にそれぞれピークを示し、3 日目、4 日目は、徐々に低下し、その後正常値に復した。猫の心不全時における血漿 L-カルニチン濃度の変動は今まで不明であったが、今回同一臨床例で 3 回の再現性を持って確認された。血漿 L-カルニチン濃度の変動は心筋虚血を反映したものと考えられ、今後猫の心疾患の検査項目として有用と考えられる。